

垂水史談会報

2019(平成31)年
2月発行 垂水史談会
第34号

【報告】

―垂水高等学校・史蹟めぐり―

二〇一八年十二月七日(金)、垂水高等学校の全校生徒136名の参加による「史蹟めぐり」が行われました。史蹟めぐりのコースは3つありますが、今回は水之上方面の史蹟や文化財などを訪れ、生徒たちは約18kmを踏破しました。当日は曇りがちで、多少風もありましたが生徒たちはそれぞれのポイントで、コースにある史蹟や文化財について興味深く説明に聴き入っていました。



【武道館で出発前のオリエンテーション】

【コースは学校↓肝付素方句碑↓牧の薬師如来像↓水之上地区公民館(おんだんこら)↓勝軍地蔵↓水分神社↓手貫神社(昼食)↓孝子市太郎の墓↓垂水島津家墓地↓学校】

【手貫神社での説明】

地元に残る歴史や文化財に触れながら一日がかりで歩く「史蹟めぐり」は、長年垂水高等学校が取り組んでいるふるさと学習で、今後も続けて欲しいと思います。垂水史談会からは瀬角龍平と神柱利雄が参加・説明を行いました。



【「肝付素方」句碑前にて】

【お知らせ】

毎月第四水曜日午後六時から、垂水市立図書館(4月からは垂水市民館)で垂水の郷土史や文化財などについて、定例の勉強会を行っています。

『垂水市史』の読み合わせが基本ですが、資料を持ち寄つての研究も行っています。また、市内に残る文化財や史蹟めぐりなど、現地研修を行うこともあります。

ふるさと垂水の歴史や文化財などに興味のある方の参加をお待ちしております。

―西南戦争百四十年の展示会―

―平成三十年十一月五日〜十八日(市民館一階ロビー)―

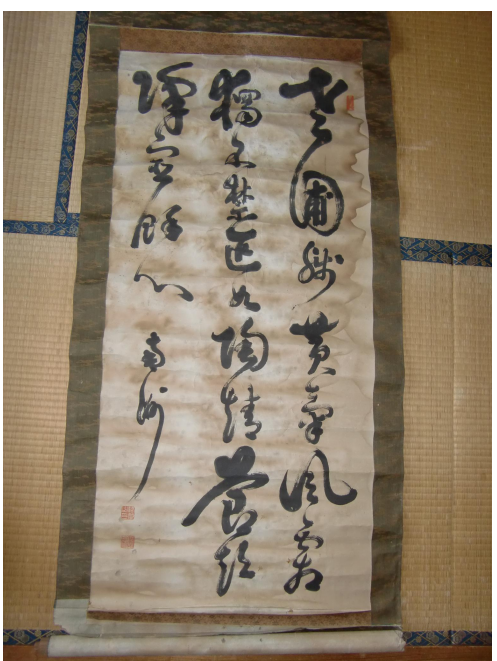
明治六年の政変(1873)によって明治政府を迫られ、下野した西郷隆盛は故郷・鹿児島に帰り、士族の青年たちの教育機関・私学校(県内各地にも分校)を作りました。

一方、西郷は県内各地で狩猟や釣りを楽しんだり、温泉地を巡ったりしています。中でも新城の上田家(大都)にはよく訪れており、新城地区では西郷の人となりをおぼせるエピソードが多く残されています。『西郷どんと新城』昭和52年発行)

その後、明治十年に鹿児島に勃発した西南戦争に対して、旧薩摩藩の士族たちは西郷軍の東上に呼応し、県内各郷から参加、従軍しました。垂水郷からも四五〇名(うち戦死者八五名)、新城郷から百九名(同二四名)、牛根郷から五十一名(同四名)が出軍しました。

垂水史談会では西郷隆盛と垂水との深い関係から、市民館一階のロビーで西南戦争一四〇年の年に当たって、十四日間にわたり展示会を開催しました。

また会場には平成三十年三月に、新城のT家の蔵から見つかった西郷隆盛の書(写真)も展示されました。



【研究ノート】

市太郎墓碑銘

―垂水新御堂、龍福院址③―

【読み下し】：() 書きは変体仮名の読み

(背面)

古登し七回の忌に當りし可ハ公又龍福院の内なる市太郎可墓に志るし
(の) (を) (た) (そ) (う) (と) (も) (お) (お) (ね) (ん) (つ) (づ) (い) (ぜ) (ん) (の) (く) (よ) (う) (を)
能石越建させ僧共に仰せて懇尔追善能供養越なさせむ。於保ん恵の
(は) (か) (な) (す) (な) (ち) (そ) (の) (い) (し) (に) (こ) (と) (の) (か) (え) (り) (つ) (け) (か) (あ) (ま) (ね)
程い者ん可多那し則其石尔事乃よしを衣里付て可の孝感を遍

(右面)

く邑中の人尔毛志らせ遠く政教を助介んとおもほし給ふ屋川可連其仰
セこと越 承 斯なん書志流して石耳き佐ま志無る所也佐連ハ童子
能令名長朽春し帝公能仁徳世く尔仰く遍き毛能南良无

あ者れい可尔苔能下にも阿ふく良む閑く留はふ可き露のめ具ニ越
天保十年己亥八月

伊集院兼愷誌



龍福院…垂水新御堂にあつた垂水島津家菩提寺、心翁寺(曹洞宗)の支院

公…垂水領主十三代・島津貴典(一八一〇～一八六四)
天保十年…一八三九年

【口語訳】

今年は(市太郎の)七回忌に当たっていたので、(貴典)公は又、龍福院の境内にある市太郎の墓に標の石を建てさせ、僧侶たちに仰せ

付けて、心を込めて追善供養を行わせたのである。貴典公の領民に対する御慈悲みの様子はたとえようもない。そこで、その石に出来事の様子を彫り付けて、市太郎の事績に対する孝感の心を広く垂水領内の人々にも知らせ、ひいては政教の助けにしようと思いなされたのである。私(兼愷)は(貴典)公の命をお受けして、このように書き記して石に刻ませた所である。そうすれば、童子(市太郎)の名声はきろと長く朽ちることなく、また貴典公の仁徳の御心は世々代々に仰ぎ見られるに違いないであらう。

(和歌)

ああ、(市太郎は)死んでしまつて墓の下にあつても(霊は貴典公の人の徳の御心を)仰ぎ見るであらう(このように深い(貴典公の)露のよみな

御恵みを

天保十年己亥八月

伊集院兼愷誌す。

(転記・口語訳等…鹿兒島史料講読会…上園正人、瀬角龍平)

【変体仮名なしの古文表記・文章のみ】—参考—

市太郎は新御堂村なる市佐衛門が子にして幼きよりよく順ふなり。萬の事共、常に父母の教へに背かず、父母も行末いと頼み深う愛し育む。

天保四の年に齡窃かに六歳に成りぬる秋の比、市左衛門、瘡の病に煩へる事有り。一日熱おもく、渴きの甚しきに耐へ兼ね、水のみて其の苦しみを休めんが為め、市太郎をして傍の井の水を汲ましむ。市太郎、急ぎ其の旨に従ひしが、誤りて井中に落り、忽ち溺れて果敢なくなれり。父の腸をさく悲しみ、何にか譬へん。其の詳らかなるは、人皆知れる所なめり。

余、よそながら聞くに忍びず。終に拙なき詞もて、稚き者の父の為に身を捨てたる事の様、片はし書き述べしに、わが公、見そなはし給ひ、下を情れむ御心の餘りに忝くも、詩を作りて是を悼ませ賜ふ。其の比、或は和歌を詠じ、或ハ詩を作るの輩いと少なからず。是れ、自づから童子孝道の至誠、人の心を感じせしむるにあらずや。余、是れを集めて一卷をなし、名付けて孝感餘編と云ふ。府城の教授、市來先生を初め、誰彼の序跋の文など数々有り。

今年、七回の忌に當りしかば、公、又龍福院の内なる市太郎が墓に標の石を建てさせ、僧共に仰せて懇に追善の供養をなさしむ。御ん恵の程、言はん方なし。則ち其の石に事の由を彫り付けて、かの孝感を遍く邑中の人にも知らせ、遠く政教を助けんと思ほし給ふ。やつがれ其の仰せごとを承り、斯なん書き記して石に刻ましむる所なり。されば、童子の令名長く朽ちずして、公の仁徳世々に仰ぐべきものならむ。

あはれいかに苔の下にも仰ぐらむかかるは深き露の恵みを

天保十年己亥八月

伊集院兼愷誌す。

—(この稿終わり)—

—たるみず春秋—

卒業子教師囲みて談笑す

山ヶ城 實行

花冷えのある当番の土曜日、職員室のストーブの前でくろいでいると先生、いらしゃいますか」と先日卒業した二人がやって来た。

おお、君たちか、ま、はいりなさい。「先生、色々と有難うございました。一健一君は工業高校、久美ちゃんは女子高に受かったつてね、おめでとる」それから・修二くんは。「俺は親父の水道会社で水商売ですよ。」そうか、みんなしつかりやいなさい。」

先生、その店で回転焼を買ってきました、一緒に食べましょう。「ありがとるじゃ、みんなそこに座つて。」と私は三人に折り畳み椅子を持ってきて、インスタントヨーヒーにストーブの薬缶のお湯を注いだ。

(文章：瀬角龍平)